The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

プトゥンのガナチャクラ儀軌『大楽遊戯』について

静　春樹

本稿は，プトゥン（Bu ston Rin chen grub, 1290～1364）最晩年の作の一つであるTshogs-kyi 'khor-lo dang dpa'-bo'i ston mo'i lag-len-gyi cho-ga, bDe-chen rnam-rol zhes-bya-ba『聚輪と勇者の饗宴の作法儀軌，「大楽遊戯」と名づける書』[1]についての概略を述べることにある．

tshogs-kyi 'khor-loとは，サンスクリットgaṇacakraのチベット語訳であり，東北目録・大谷目録では聚輪と和訳されている．先ず，ガナチャクラ（以下，聚輪（じゅりん））の性格・内容について簡単に述べる．

聚輪とは，金剛乗の信解者にして已灌頂者たちが定期的に行う集会であり，「酒と肉と性瑜伽」を不可欠な構成要素とする「タントラの饗宴」(Snellgrove) である．それは護摩・バリ等の儀礼と成就法などの観想を構成ユニットにもつ集団的修法でもある．インド仏教は思想史的にも宗教実践上からも声聞乗（*Śrāvakayāna*）・波羅蜜乗（*Pāramitāyāna*, 所謂「大乗」）・金剛乗（*Vajrayāna*）に概括される．金剛乗の修行者にとっては宗教実践を保証する根源的場としての曼荼羅の作成が不可欠である．そこで貪欲行（*rāgacaryā*）の舞台装置として男女瑜伽者によって構成される聚会曼荼羅（*gaṇamaṇḍala*）が要請される．仏教徒のこの種の集会自体が聚会曼荼羅であり，儀礼としての観点からは聚輪となる．さらに聚輪は，金剛乗が展開した戯論（*prapañcatā*）・無戯論（*niṣprapañcatā*）・極無戯論（*atyantaniṣprapañcatā*）からなる〈行の体系〉では諸仏・持金剛が遊戯する「戯論の行」に位置づけられる[2]．

いくつもの根本タントラが記述する「タントラの饗宴」の有り様は，それが実際に行われていたものであれ，作者たちの想念を記述したフィクションであれ，東西の宗教思想史上に例を見ないあまりにもおどろおどろしく過激な内容である．一方で，タントラに記述されているような仏法に敵対するバラモンやヒンドゥータントリスト（主に*Śākta*）たちの殺害儀礼を三昧耶として宣揚する思想や「七生人」(*saptavarta, saptajanma*) の肉の摂取による悉地獲得を説く内容には触れず，「過激さ」を薄めた儀礼マニュアルとしての聚輪儀軌が作成されてくる．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

金剛乗の宗教実践が展開する過程で，聚輪儀礼とは少し内容を異にする，具名で挙げられている「勇者の饗宴」(*vīrabhojya & vīrābhojya*) 儀礼が現れてくる．この儀礼の特徴は，男女瑜伽行者が前面に出て行われる聚輪に対して，僧伽の伝統的な構成員である六衆が中心となって行われるものであり，男女の性別に従い「男性勇者の饗宴」と「女性勇者の饗宴」の二つに分けられる．各集会を指導する比丘や比丘尼の金剛阿闍梨にはそれぞれ反対の性をもつ人物一人が施主によって捧げられる．儀礼の構成からもわかるように，この儀礼を案出し喧伝した阿闍梨たちの意図は，伝統的な僧伽の六衆が参加する比丘（比丘尼）主導の聚会を広めることにあったと考えてよい．

さて，声聞乗・波羅蜜乗・金剛乗の三乗となって展開したインド仏教総体をチベット人は増減することなく正法として受容した．プトゥンも金剛乗に特有な「戯論の行」であるガナチャクラについて，タントラ・註釈書・儀軌を精査した上で，それらを組み込んで自らの聚輪儀軌を作成しており，これは聚輪儀礼の全体像を把握する上で格好の文献である．それらのインド撰述文献とは，『サマーヨーガ』『秘密集会』『ヘーヴァジラ』『チャクラサンヴァラ』『チャトフピータ』『サンヴァローダヤ』『サンプタ』等の諸タントラと Ratnarakṣita『有蓮華』(Toh 2494), Mañjuśrīkīrti『一切秘密総儀軌心髄荘厳』(Toh 2490), Puṇḍarīka『ヴィマラプラバー』(Toh 1347), Vajrapāṇi『サンヴァラ摂義註釈』(Toh 1402), Abhayākaragupta『アームナーヤマンジャリー』(Toh 1198), Āryadeva『曼荼羅儀軌』(Toh 1613)『行合集灯』(Toh 1803), Padmākara『五種三昧耶』(Toh 1224), Ḍombiheruka『聚輪儀軌』(Toh 1231)『瑜伽者と瑜伽女の不共儀教誡』(Toh 1230), Kṛṣṇa『聚輪供養次第』(Toh 1258), Ratnākaraśānti『ヴァジラバイラヴァ聚輪』(Toh 1995), Ghaṇṭāpāda『聚輪儀軌』(Toh 1439) 等である．

インド撰述の聚輪関連文献集成の観がある『大楽遊戯』の特筆すべき点は以下である．まず，本儀軌の大枠としては，『サンヴァローダヤタントラ』第八章「三昧耶品」を土台にして構成されている．そして「入れ子構造」となっている各次第・ユニットごとに，各タントラに随順した異なった所作が記述されていることから，聚輪儀軌の詳細と広がりが理解できる．

金剛乗が展開した〈行の体系〉のもつ三範疇の内の「戯論の行」の典型となる聚輪について，プトゥン自らが「肉と酒と性瑜伽の三つの供養を充たさなければ聚輪は成立しない．まさにその三つの享受なくしては聚輪の所作とはならない．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

『愛欲論』の中で述べられている如き交会に熟達した技を用いて印契女と等至の瑜伽を為せ」と述べる．

さらに，プトゥンは金剛乗の集団的修法にとって不可欠な「舞台装置」としてその場に作成される曼荼羅を「図絵曼荼羅」と「聚会曼荼羅」の二種に大別し，その両方の方規別に儀軌の細則を記述している[3]．

このように，『大楽遊戯』は「貪欲行」を根幹とする金剛乗の思想的枠組に忠実に，インド撰述の文献を下敷きにして構成された儀礼マニュアルである．

しかし，チベット仏教最高の学匠であるのみならず，「行規清浄の宗風」を発揚した比丘の代表者の一人と考えられているこのプトゥンの著作『大楽遊戯』というタイトル自体が多くのチベット仏教研究者に対して，ある種の違和感を与えることは否めないであろう．しかし，インド仏教金剛乗の過激な三昧耶を文字通りに遵守し，酒肉，性瑜伽，さらには「度脱」までも宣説しているチベット人比丘 Rwa 訳経官 rDo rje grags がいる．『Rwa 伝』で彼は以下のように語る．

> 酒肉を受用するのは聚輪である．女性に承事するのは羯磨印である．三昧耶を壊損する者を度脱するのは真言の三昧耶である．私はこのように承知している．そうだとすれば，持律者比丘と何の矛盾があろうか[4]．

Rwa 訳経官の正確な生没年については不明であるが，［羽田野 1986: 262, 276n11］は，彼を Mar pa 智者（Mar pa Chos kyi blo gros, 1012 ～ 1097）の年下の同年代人とし，11c 中葉から 1110 年頃にかけて生存したとする．Rwa 訳経官は，生涯を通して自分に敵対した数多くの持金剛者をヴァジラバイラヴァの法を用いて文殊の国土へ送ったとされることからも威力をもつ宗教家であったことは間違いない．『Rwa 伝』によれば，彼は生涯で事あるごとに師匠となるインドの阿闍梨たちに聚輪を捧げている．しかし彼はプトゥンの二世紀以上も前の，終焉を迎えつつあったインド仏教からチベットへ法の伝播が活発に行われていた時期の人物である．その後，インドで仏教が滅亡したことで交流が枯れたこともあり，チベット仏教が既に受容した仏法を内的に消化して独自の展開を見せていたプトゥンの時代において，果たしてプトゥン本人は聚輪儀礼をチベットの地で自分のマニュアルどおりに行い，また他者によっても行われると考えたのであろうか．

酒肉の饗宴と性瑜伽の実践は保持し，「五甘露」（*pañcāmṛta*）や「五灯明」（*pañcapradīpa*）にはさりげなく触れるものの，プトゥンは「七生人」の供犠や難調なる輩の殺害などの三昧耶については言及しない．他にも彼は，タントラの過激な文言および註釈者がそれらタントラに忠実に祖述した註釈箇所は注意深く篩

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

い分けている．

実際に行うための儀礼の指南書が儀軌（マニュアル）である．金剛乗の阿闍梨たちは実に多くの儀軌を作成した．儀軌の内には，ただ作者が構想した想念を記述したに過ぎないものもあったであろう．しかし，その多くはインドの地において，宗教実践の指南書として機能したと考えて間違いないであろう．そして聚輪儀軌が作成される前提として，在俗の瑜伽行者および僧伽に所属する僧尼たちの定期的な聚会の存在が文献から認められる．その点で，プトゥンは，世間的な配慮と儀軌としての実行可能性という基準に従って「タントラに現れる聚会」とは違った位相で聚輪儀軌を纏めたと言える．この点からすれば，『大楽遊戯』は，集団的修法（聚会）という目的に十分に答える条件を備えている．

その具体相を金剛乗の歴史に探ることは困難であるが，修法展開の過程では，聚会における諸々の設営と現実的行為が観念化されて，修法者個人の所作・行法が中心となった聚輪供養「法要」となってしまう段階が想定される．これは今日のチベット仏教が行なっている「聚輪供養」の姿である．この段階へ到る過程を明らかにするには，Mar pa 智者や Rwa 訳経官以降にチベット仏教が独自に展開した聚輪儀礼の研究が必要である．

この『大楽遊戯』には，詳細なバリ儀礼が説かれていることを考慮に入れると，祝祭にして同時にそれが修法である聚輪の実際の行為が観念的に代替されて「法要次第」に変化していく方向が予見される．プトゥン自身も，『大楽遊戯』を完成（1362 年 4 月 23 日）した半年後に，『大楽遊戯供養』[5] を著述している．この著作は実際に行われる集会のマニュアルではなく，あくまでも供養法次第であることを述べておきたい．

大方の意見どおり，彼の時代のチベットでは，その編集した儀軌どおりに実際の大衆集会である聚輪儀礼が仏教教団において公然と行われることは無かったとするならば，この文献を編著する目的はインドで作成された数多くの聚輪儀軌の集大成としての意味に限定されるであろう．まさしく，すべての仏説を増益・損減しない Atiśa 以来の伝統に立って，プトゥンは，インド仏教が展開した三乗のすべてのジャンルを集大成したのである．

1）東北蔵外 5067 *The Collected Works of Bu ston*, ŚPS vol.47, Lokesh Chandra（ed.）1967.

2）詳しく言えば、gaṇamaṇḍala が「無戯論の行」gaṇacakra が「戯論の行」に配当される。

3）ŚPS vol.47, 388a4-6, 388a6-7, 392a7-b6, 392b6-7.

4）『Rwa 伝』fol.125a3-4,［羽田野 1986: 274］

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

5）Toh 5054 dPal dkhor-lo sdom-pa'i mchod-pa'i phreng, bDe-chen nam-rol-gyi mchod-pa, ŚPS. pt.7（Ja）425L1-454L7.

〈略号〉

『Rwa 伝』: Rwa Ye śes seng ge, mThu stobs dbang phyug rje btsun Rwa lo tsā ba'i rnam par thar pa, Kun khyab snyan pa'i rnga sgra（New Delhi, 1991）.

〈参考文献〉

静　春樹　『ガナチャクラの研究：インド後期密教が開いた地平』山喜房佛書林，2007.
「プトゥンのガナチャクラ儀軌『大楽遊戯』和訳（2）」『高野山大学密教文化研究所紀要，22, 2009.
羽田野伯猷「チベット人の仏教受容について」『チベット・インド学集成』第一巻，法蔵館，1986.

〈キーワード〉 プトゥン，ガナチャクラ（聚輪），勇者の饗宴，聚輪儀軌，金剛乗

（高野山大学密教文化研究所研究員）

新刊紹介

永ノ尾信悟，Dominic Goodall，久間泰賢，Alexis Sanderson，
Francesco Sferra，杉木恒彦，田中公明，種村隆元

『Genesis and Development of Tantrism
タントラの形成と展開』

B5版・596頁・本体価格18,000円
山喜房佛書林・2009年4月

NII-Electronic Library Service